埼玉大学紀要　教育学部，57(1)：169-170(2008)

本田貴侶先生から学ぶこと

稲葉　喜徳*

昨年の3月のことである。まだ埼玉県の教育長の職にあったとき、一本の電話をいただいた。おだやかでぬくもりのある声音がとても印象的であった。私にとって初めての本田貴侶先生との出会いであった。

4月から埼玉大学教育学部にお世話になることが決まっており、美術教育講座に籍を置かせていただくことになっていた。本田先生は講座の中心にいらっしゃる方。本来であればこちらからご挨拶すべきところを、先生からの早々のお電話であった。温厚であるとともに気配りの方であることも知った。そして、これまで1年半ほどの短い期間ではあるが、先生から多くのことを学ばせていただいた。そのことをまず深謝申し上げたい。

【明るく伸びやかであれ】

そのころの先生は腰を痛めておられ、杖を余儀なくされていた。長年の創作活動に起因するものであり、文字どおり身を賭してのお仕事を物語っていた。

大学図書館の正面玄関前にたつ「ある晴れた日に」の像が先生の作品であるのを知ったのは、間もなくのことである。いかにも明るく伸びやかであり、陽に輝く姿ははつらつとして希望に満ちあふれている。生の喜びをからだ全体であらわしているこの像は、まことに大学にこそふさわしく、未来を担う若人への愛情と信頼と期待が、作者の想いとして伝わってくる。本田先生から学ぶべきことの第一はこのこと、つまり「明るく伸びやかであれ」ということだ。

それにしても、現在の社会は、いかにその対極にあることか。とくに教育を巡る動きの、なんと危ういことか。教育再生会議の議論を見ていると、そこには未来への展望はほとんど感じられず、ますます競争を常態化させること、そして鋳型のごとき「徳育」が強調されているだけである。本年6月1日の第2次中間報告では「学力向上にあらゆる手立てで取り組む」として、授業時間数を10%増とし、教科書の分量を増やして質を高め、全国学力調査の結果を徹底的に検証し活用する、などとある。

そんな世相であるからこそ、「ある晴れた日に」の像は、いっそう私たちを惹きつけるのだろう。若者たちのすこやかな可能性を表現するその姿は、どこまでも光の中にあるのだ。

【豊かな心であれ】

小中学校などの教育現場は、現在、団塊世代の大量退職時代を迎え急速に新陳代謝が進もうとしている。それだけに多くの若い人たちに教師を志してもらいたいのだが、むしろ国立大学の教員養成系への志願者は減少している。バッシングされるばかりの教師と学校、競争原理と管理主義が強化される傾向に、受験者は敏感に反応しているのだ。

これは、たいへん大きな問題だと思う。子どもは未来そのものである。教育は、未来に深くかかわる営みである。その教職に若い人たちが魅力を感じないとすれば、それは社会の一つの危機と言っても過言ではない。経済至上主義と称される現代社会の下で、人々にとって本来欠くことのできない大切なものが、失われようとしているのだ。

* 埼玉大学教育学部美術教育講座

本田先生は、以前からこうした傾向を深刻に察知されていた。そして実践的な対応をされてきた。それは、埼玉県教育委員会との協定にもとづき、2002年4月に開設された「ミュージアム・コラボレーション」にもうかがうことができる。これは県立近代美術館との連携事業であり、学生が美術館のスタッフになって子どもたちの作品鑑賞を手助けし、大学がその活動を単位認定するという試みで、全国的にも例を見ない実習授業である。

昨年の7月29日、平成18年度前期授業の中間発表会に私も参加させていただいたが、受講学生からは、子どもと接することの難しさと楽しさが異口同音に語られた。多くの学生が、子どもの発想の豊かさと柔軟さに驚かされたこと、大学の構内では得られない経験であり貴重なことを学んだことを指摘した。本田先生は、そんな学生たちに実に丁寧な指導をなされていた。

そのとき確信したのだが、本田先生の姿勢に一貫して流れている願い、それは若い人たちにどこまでも豊かな心でいてほしいということ、未来に向かって大切なものをしっかりつかんでもらいたいということに相違ない。

【凛とした青春であれ】

私は東北が好きでよく旅に出かける。とりわけ岩手に魅せられていて、これまで幾度となく訪れてきた。盛岡の駅に降りたち、北上川にかかる開運橋から左手に岩手山を望むとき、故郷と形容してもよいほどの懐かしさを覚える。

本田先生は、東京芸術大学修士課程美術研究科修了後、岩手大学に勤務された。1970年から78年のことである。先生には、お会いする前から知遇をいただいていたような気がしているが、それは岩手を介してのことかもしれない。もう少し正確に言えば、盛岡の啄木像と不来方城(こずかたじょう)跡の歌碑を介してのことかもしれぬと思っている。

開運橋を渡ると、道は大きく二股に分かれる。左側の大通りを進むとそこは盛岡一番の繁華街で、洒落た店舗が連なっている。その2丁目の丸藤菓子店前に「少年啄木像」がたっている。台座には「新しき明日の来るを信ずといふ　自分の言葉に　嘘はなけれど」と刻まれている。本田先生作の啄木の少年像なのだ。「希望に胸をふくらませ、厳しい北風の中に立つひたむきな姿を、あますところなく表現している」と評価は高い。

さらに大通りを先へ行くと、岩手公園に出る。ここは南部藩の不来方城のあったところ。その小高い城址に、よく知られた啄木の歌碑がある。

不来方のお城の草に寝ころびて
空に吸はれし
十五の心

昨年の春、美術教育講座で私の歓迎会を催していただいたおり、本田先生との歓談で話題が盛岡と啄木に及び、期せずして先生と私の口から出た歌であった。赤貧に生きた啄木、それだけに暗く心に沈む歌が多い中で、この歌のなんと初々しく清々しいことだろう。それは、本田先生作の凛とした少年像そのものであり、私たちにもう一つの啄木の生き生きとしたイメージを与えてくれているのだ。

本田貴侶先生には、どうかいつまでも若々しくあっていただきたい。そしてもっともっとご指導を仰ぎたい、と願っている。

(2007年9月28日提出)
(2007年10月19日受理)